



「貴き者の責務」

日本住宅公団初代総裁 加納久朗 第六回

作家 高崎哲郎

加納久朗の成長と意志

加納久朗は、明治19年（1886）8月1日、子爵加納久宜・文子夫妻の次男として、東京・小石川の私邸で生まれた。久朗より加納家3代前にあたる久徴（江戸幕府講武所総裁・奏者番などを歴任、幕閣中枢で活躍）と読みは「ひさあきら」で同音である。加納家や一宮町関係者は2人を区別するため久徴を「きゅうちょう」、久朗を「きゅうろう」と音読みして区別している。

加納家は大家族である。長男久元は明治13年9月に生まれたが、ジフテリアにかかり夭折した。それだけに次男久朗の誕生は家族から感激と歓喜とをもって迎えられた。彼は実質的な加納家嫡子（後継者）となる。彼の上に2人の姉がおり、長姉嘉子（陸軍中将武田三郎夫人）は明治11年10月に生まれた。次姉次子（明治15年3月生まれ）。長姉嘉子は嫁いで間もなく他界し、久朗のすぐ下の妹沖子（明治17年1月生まれ）が武田三郎の後妻となる。弟久憲（明治22年1月30日生まれ、農学者、キリスト教牧師）は3歳年下の唯一の実弟である。欽定憲法発布の年の生まれであることから「久憲」と名付けられた。2番目の妹國子（明治23年生まれ）。3番目の妹八重子（明治24年8月生まれ）。4番目の妹治

「私の小学3年の頃、Dutch Reformed Mission（キリスト教・オランダ改革派布教団）の宣教師ピーク博士が鹿児島に赴任し、知事の官邸に父久宜を公式訪問された。私の父母は懇慫に師を迎え挨拶を交わした。それが縁で、兄久朗と私は（父の依頼もあって）ピーク夫人のところに英語を習いに行くことになった。その時私はアルファベットも知らなかった。キリスト教に接する初めての体験であった」

「ピーク先生の御住居は、西郷さんの御墓のある浄光明寺の山の麓にあつて、畑の中に小さい家を新築し、毎日数時間、家族から離れてその中で一生懸命日本語を勉強していた。私（久憲）は高等学校の時、再び東京から鹿児島に来る様になって、大正8年（1919）の暮れ、クリスマス祭も近い頃、丁度日本キリスト教会が無駄*であつたので、ピーク先生が出張されたのを機会に私は洗礼を受けた」

加納兄弟が、鹿児島の小学生時代にアメリカ人の若い宣教師ピーク博士の夫人から教養人の英語を直接教えてもらったことは、二人が社会人になって欧米の地で活躍することを考えると、極めて重要な体験と言える。

「父は鹿児島に地方長官（知事）として7年間も勤務したが、民党と吏党の争いの激しかった地に、いずれの政党にも属せず、ひたすら滅私奉公、忠君愛国主義で、産業政策に熱中し、県民のため殖産・教育・衛生・土木などの各方面に献身的努力をした。ですから知事官舎の庭まで農事試験場になって、各種のニワトリ、蜜蜂、果樹、野菜、それに堆積肥料の小屋、屋内では母親が指揮者で養蚕、

子（国務大臣後藤文夫夫人）、5番目の末の妹夏子（明治26年9月生まれ、実業家麻生太賀吉母堂）。母文子は久朗が7歳の時、明治26年に他界した。継母として旧幕臣原三蔭の次女鑑子を迎える。（第4回一部既述）。

久朗生誕のこの年は教育制度の改革初年度にあたり、小中学校令・師範学校令・帝国大学令が公布された。父久宜は、すべての国民が等しく教育を受けられるように教育制度の近代化を求めた有識者の一人であつた。

久朗が人生の入口に立つて大きな影響を受けたのが教養人である父久宜である。次いで青年時代に決定的な影響を受けたのがキリスト教指導者内村鑑三（次号で詳述）であつた。

◇

久朗は「回顧録」を残していないが、実弟久憲が自叙伝『アメリカ生活 60年、在米同胞の一人として』（非売品）を晩年に記している。家系や少年時代の思い出から80年余りの人生を語ったこの自叙伝を手掛かりに、久朗の幼少年時代や加納家の暮らしぶりを追ってみよう。（「自叙伝」の一部を修正し要旨のみを引用した場合もあることをお断りしておく）。

「父久宜は上総国一宮藩主の養子となり、加納遠江守と称し大名でした。王政復古で

生け花、料理の講習会をやったり、乗馬用の馬3頭もいて、私（久憲）は幼稚園にはポニーに乗つて通つた。畜産奨励のためだった」

「私は中学3年生の時、学習院に転校した。学習院は当時四谷見附の近くにあって、兄久朗は3つ上の級にいた。大森から汽車で新橋まで行き、それから徒歩で通学した」

久宜が鹿児島県知事を辞職したのは『家族の意見を入れて』であるが、それは単に経済的な面だけでなく子ども達の教育を考えてとの面もあつたと思われる。久朗の学習院中等科（旧制中学校）5年生への編入学は、加納一家が東京・入新井の私邸に戻つた明治33年（1900）9月である。学習院の同級生の多くが皇室や華族の子弟であつた。

久憲は鹿児島県を「第二の故郷」と懐かしみ旧制高校生入学試験の際に第七高校（現鹿児島大学）を選んで鹿児島県に戻り、5年後東京帝国大学農科大学入学に伴つて帰京する。「鹿児島弁」を自慢した。

◇

久朗が晩年に学習院同窓会に寄せた「感想」（昭和29年3月14日）がある。彼は68歳で翌年日本住宅公団初代総裁に就任する。（現代語表記とする）。

「感想

加納久朗

（前略） 考えれば学習院時代に受けた教育は貴重なものである。文化教育の上でも当時としては進んで居つた。それは当時学校の財政が豊かで、先生の生活が保障されて居つたからである。此の点、今日の学習院のゆとりなき貧しい教育に比較すると、我々は何と幸

領地を返還し朝廷から子爵の位を頂いた。私（久憲）は東京・小石川の家に生まれたが、2歳の頃大森に移転した。大森と言っても真の番地は東京府荏原郡入新井村新井宿（現東京・大森）と言つて山手の方にあつた。私たちの家は丘の上にあつて田圃の彼方に東京湾を眺めていた。この家は半分くらい洋館になつていたので、終戦とともに進駐軍が接収して将校クラブにした。大森駅から東海道線で新橋駅まで20分くらいかかった。周囲には梅林が多かつた。私が学習院の中学時代に、明治天皇の皇后陛下が家の庭にお出下さり光栄に感じ、両親は陛下が椅子にかけられて、海の方を眺められた処に大理石で記念碑を建てたりした」

兄久朗も小石川で生まれ入新井村で幼時を過ごした。

「明治27年1月、父久宜は鹿児島県知事に任命された。私の5歳の頃（久朗8歳）であつた。当時鉄道は東京から広島までで、鹿児島に行くには神戸まで汽車で、それから1000トンもない小さな汽船で行くのが一番便利だつた。一行は、両親の他、祖母、姉2人、兄（久朗）、久憲、妹4人、乳母2人、子守1人、農業の出来る男僕1人とでなかなかにぎやかだつた。その頃、鹿児島県には鉄道はなく、電灯も電話もなかった」

福であつたことであろう。

学習院が、我々に教えたことは『破廉恥』なことをするなということであつた。我々の時代は、日本が勝利の時代であつたが、今日は『敗戦の日本』、『やみ屋の日本』そして『アルバイトの日本』を経過した学習院である。だから今の学習院の学生諸兄は気の毒であると思う。

我々の『外なる生活』即ち肉体はだんだん衰えて行く、生命は短くなつていく、けれども我々の『内なる生活』は幼少時代の回顧を楽しみ、旧友との友情を更生して人生の最大幸福を感謝して味わうことが出来るよう」

イギリス紳士の生き様を理想に掲げる久朗は「破廉恥なこと」を生涯極端に嫌つた。

◇

◇

加納家の「教育方針」は、父久宜のリベラルな人生観を反映して自由主義的であり、同時に先進的でもあつた。そのひとつに「家庭演説会」がある。『刻まれた歴史』（中村信夫）から引用する。

「明治41年、内務省に入つた後藤文夫（4番目の妹治子の夫）は地方局に配属されたが、そのころ加納久宜は町民に請われて上総一宮町長になつていた。かつての藩主であり、鹿児島県知事で令名を馳せ、また貴族院議員でもある『大物』町長である。内務省も自治功労者として加納を大切にし、講演会や研究会に講師として招聘し、その意見を聞いていた。後藤も入省当時は、大講堂で加納の話を聞いたあと、千葉県東金

町で開かれた内務省主催の地方自治講演会で主役講師である加納一宮町長に随行し、講演を記録する仕事を命じられた。後藤が加納と言葉をかわしたのはこれが初めてであった。さらに上司の命令で、後藤は加納家を訪問し、その家庭演説会に列席する機会があった。間もなく加納家の6女治子との縁談が持ち込まれたのであるが、これは久宜が2回会っただけで後藤の器量を見込んだのであったと伝えられている。

後藤が書いた『加納子爵の家庭演説会』（『斯民』第4編第4号・明治42年）は、加納家の家庭を伝えていて興味深い」

「：加納子爵は意を家庭に用いられることが殊に深くして、その家庭は世に模範家庭と称せられております。後学の余は、家庭に関する子爵の意見を伺うというのが、訪問の主旨でありました。：（子爵は）きわめて謙遜懇懃なる態度と語調で、自分に向かつて遠来を感謝された後、静かに椅子を寄せられた。子爵の謙遜なることは有名でありますが、自分の如き一介の書生に対しても、丁重謙遜なるは、実に恐縮の外はないのであります。：（子爵は）『とに角今夕は、家庭の平常そのままの有様を觀じられたうえで、遠慮なく批評していただきたい。幸い今夜は、家庭演説会を開いて娘どもが旅行の感想談をやることになつていますから、家族と夕飯をともにせられて、演説会に臨席をいただきたい。その間にお尋ねに対して、意見などもありますならば、申上ぐることにいたしましょう』といわれた。：

『：家庭演説会とは人の前で自分の思うことを明確に述べる練習をしたり、また平生の青年たちと植樹を行い、その数は6万本にも達した。経費の多くは加納家が負担した。弟久宣は「自叙伝」で記している。

「私（久憲）は大学3年間の毎夏に郷里上総一宮町の小学校児童に観海流の水泳を教えた。校長及び数名の教師方が応援されたので、100人ずつ3夏教えた。先年、45年ぶりに郷里を訪れた際、沢山の教え子が私を歓迎してくれた」

「水泳教室」は久朗の発案だった。

「私の兄久朗は英語が好きで熱心に勉強した。当時、学習院には神田、南日、熊本などという英語の大家が教授として教鞭を取られていた。或日熊本教授は私の兄に、君がそんなに英語が好きなら是非バイブルを一読するがよい、シェクスピアも大文学もバイブルが根底になつている、と忠告された。以来兄は聖書に親しむようになり、自然と信仰に入つて行つた。東大の法科にいる時は専ら内村鑑三師の指導を受けていた」（久憲「自叙伝」）。シェクスピア全集（英文）はロンドンの書店から取り寄せ、大学生時代から読み始めている。

◇

◇

明治42年10月8日、久朗は学習院高等科を卒業して東京帝国大学法科大学政治学科に入学した年に結婚する。新郎は23歳の若さであった。新婦は土族伊藤祐敬（松本藩士末裔）の5女多津（または多津子）で18歳だった。彼女は東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）を卒業したばかりで、才色兼備である多津の結婚を久朗以上に父久宜が求め師範

考えを述べて、互に切磋琢磨をもしたり、併せて高尚な娯楽の機関たらしめようというのが、この会の目的であります。6年前から創めまして、毎週土曜日が定日で：既に300回ほどになっています。演説会には一家そろつて、下女下男までも列席させ、彼らにもまた順番で、何か話をさせることになつております」

：令嬢3人の旅行感想談は、とりどりに面白かつたのであります。：3人のお話が終わりましてから、女中さんの一人が立つて『節儉』という題の短い話がありました。：今夜自分が子爵の家庭におりました数時間は、興味もいよいよ深いように感じまし、楽もまた益々多きことを覚えたのであります。清快の2字は、全く子爵の家庭における、自分の感情を表するのに最も適当な文字であらうとここに思つたのであります。：「こういう家庭に育つた治子がどういふ人柄であつたか、説明するまでもないだろう。それは加納自身の人柄を物語っているものであらう。

演説会には一家はもちろんのこと下女下男までも参加させ、彼らにもまた順番で話題を提供させたとは、加納家が華族であることを考えると極めて先進的と考えられる。明治39年（1906）8月10日、久朗は成人式を迎え、政府より従五位の位階に叙せられた。正式に華族の一員になつたのである。

◇

◇

明治42年（1909）9月、久朗は東京帝国大学法科大学政治学科に入学した。大学同期に重光葵（後に外務大臣、総理大臣などを

学校まで出向いたという。学生結婚であつた。多津の父方祖父は松本藩重臣伊藤軍兵衛で、軍兵衛は幕末、江戸高輪東禅寺のイギリス仮公館襲撃事件（第二次）を起こしたことで知られる。尊王攘夷派の彼は仮公館を警護中イギリス水兵2人を殺害し、逃走の後自刃した。東京女子高等師範学校は、当時女子の国立最高等教育機関で高等教育のための教員養成機関であつた。男子の東京高等師範学校（現筑波大学）とともに名門であり難関校であつた。明治44年（1911）2月、長男久道が誕生した。

学生時代の久朗は左翼思想にも影響を受けた。『九十九里』（毎日新聞千葉支局、昭和48年12月1日刊行）を引用しよう。「青年時代の加納さんにもエピソードは多い。大学卒業の頃、『これからの日本』と題した政府批判の著書を出版し、たちまち発行停止に。華族ということで逮捕はされなかったが、左翼運



若い加納夫妻と長男久通
（大阪時代か、一宮町教委「加納家史料」）



久朗の東京帝大卒業証書
（学生時代、法律書よりも英米の経済学専門書をよく読んだ。一宮町教委「加納家史料」）

歴任）、芦田均（同じく後に外務大臣、総理大臣を歴任）らがいる。二人との交流は生涯続く。法学よりも経済学を好んだ。農業経済の専門家である父久宜の影響だろう。久朗は、大学在学中に千葉県一宮町長を務めていた父久宜を援けるため同町に青年会を創設して会長となり青少年の育成にあたつた。父久宜は農村青年の研修に力を注いだ。農園をつくり、果樹、蔬菜の栽培方法を教え、養鶏、養豚などの飼育を指導し、稲作の新技术の導入や米の品種改良・増収を図つた。私立一宮女学校を創設して女子教育の充実を推進した。ドイツ式耕地整理法を取り入れ、現在のJR上総一ノ宮駅東側一帯の水田（約150町歩、1町歩は約99アール）の耕地整理を行った。ハシゴ目状の広い美田に整理され、全国からその技術に学ぼうと見学者が多数訪れた。

こうした父の行政手腕を大学生久朗が支え、その後は弟久憲が受け継いだ。久朗は青年を対象とした「読書会」、「運動会」などを催した。町有山林に在学中の3年間をかけて

動の指導者・片山潜が「上流階級のあなたが：」と驚きと感激の手紙を寄せている」

「これからの日本」は入手不可能である。だが彼のその後の政治思想や行動から判断すると、藩閥政治や軍国主義を批判し、社会民主主義の樹立を訴えた内容ではなかったかと想像される。インテリ青年らしい社会正義に燃えた論旨だったのであらう。明治44年7月東京帝国大学を卒業し、1年間町長久宜の仕事を手伝い、翌大正元年横浜正金銀行に入社した。同行は国際為替銀行としてはロンドン・ニューヨークの為替銀行と肩を並べる世界3大の国策銀行の一つで、語学に秀でた久朗は面接のみで入社が認められた。初任給は35円で、帝大卒として恵まれた金額だった。彼は東京本社で研修を受けた後大阪支店勤務となり、その後大連（中国）支店勤務となった。長い海外勤務の始まりである。

「（久憲が大学を卒業した）大正5年（1916）、私（久憲）の5人の姉妹は日本にいたが、実兄久朗の一家は満州大連市にいた。兄が横浜正金銀行の支店に勤務していたので、夏の渡米（10月8日）を前に別れのあいさつにいった。一日、南満州鉄道所有のヨットを借りて広い湾内を帆走したのは愉快であつた。それから満州と朝鮮を視察して帰宅した」（久憲「自叙伝」）。久憲は永住を決意してアメリカにわたる。

（参考文献：千葉県一宮町教育委員会蔵「加納家史料」、「加納久宜集」（松尾れい子編）、『学習院百年史』、『アメリカ生活 60年、在米同胞の一人として』（加納久憲自叙伝）、『一宮町史』、『刻まれた歴史』（中村信夫）、『九十九里』（毎日新聞千葉支局）、中村泰氏論文、筑波大学付属図書館資料など）

（つづく）。